龍谷大学 大学院 NPO･地方行政研究コース　ニュースレター

グローカル通信

2015.12 vol.39

Ryukoku University
GLOCAL TSUSHIN

早いもので、もう師走となりましたが、みなさまいかがお過ごしですか。修論提出予定の皆さんはいよいよ佳境を迎え、慌ただしい日々をお過ごしのことと思います。

今回のグローカル通信は、当コース修了生による修士論文執筆記と院生の海外での活動報告の２本立てでお送りします。論文執筆中の方は、先輩の執筆記をぜひ参考にして素晴らしい論文を書き上げてください。

２名の院生によるオランダと中国での活動報告の他には現役院生の論文執筆の様子、院生合宿の報告といった内容を掲載しています。

寒さが厳しくなってまいりました。元気でよい新年を迎えられるよう、年末はどうぞ暖かくしてお過ごし下さい。　（編集部）

職員一人ひとりの内なるリーダーシップを開拓するために	1
NPO の文化が引き出す行政職員の可能性	1
修士論文執筆記	2
海外調査レポート	3
合宿記　初秋の京都丹波で交流を深める政策学研究科合宿	4
修了生の今	4
事務局インフォメーション	4

職員一人ひとりの内なるリーダーシップを開拓するために

福井 正明
（滋賀県 高島市長）

今年度、政策部内に「政策推進室」を新設しました。主要業務は、自律的で持続可能なまちづくりを推進するため、地方創生総合戦略や第2次総合計画の策定に基づき、所管課とともに重要施策について議論し、推進していくというものです。

この政策推進室が異色なのは、部内の職員ばかりでなく、日常は窓口業務や福祉、産業、人事など様々な所属の職員に、兼務発令をすることで組織している点です。

市ではこれに先立ち、昨年から「実践型政策提案研修」を行っています。庁内から研修生を公募し、視察研修や関係機関等との議論も経て、グループで政策提案を行ってもらうものです。先日行われた提案発表会では、研修生の一人が「自ら考え続ける」ことの重要性を述べてくれたのが印象的でした。

政策推進室も、政策研修生も、構成職員は40代までの職員で、フラットな横型組織であると言えます。市役所のように、様々な施策分野があり、相当数の職員を擁する組織では、縦型組織に一定の効率性があるのは事実ですが、活発な対話を促すためには横串を刺すことも必要です。

近年、産・官・学・金等、多様なセクターによる協働も話題になるところですが、行政内部でも集合知（コレクティブ・インパクト）による課題解決力と、様々な立場の方と対話する力を備えることが、今後一層複雑化・多様化する社会課題を克服する力となることでしょう。

この時、それぞれが持ち寄る力で最も重要なのが、専門知識や経験、スキル以上に、職員一人ひとりの内なるリーダーシップです。

皆の先頭に立つ誰かが口火を切り、議論を引っ張り、結論を導いてくれるのを待つのではなく、まず自分が口火を切る、誰かは経験知を差し出す、また違う誰かは関係課との調整にあたるというように、それぞれの自発性こそが、課題解決のスピードを上げる重要な要素です。

「政策推進室」は、永続的に設置されるべきものとは考えていません。全ての職員が、自らのリーダーシップを開拓し、集合知による課題解決に主体的に参加する。そうした風土を開拓する、触媒の一つなのです。

NPOの文化が引き出す行政職員の可能性

村上　悟
（特定非営利活動法人碧いびわ湖　代表理事）

合い言葉は「子どもと湖が笑ってる未来へ」。私たち NPO 碧いびわ湖は、琵琶湖のせっけん運動を原点に、身近な自然、身近な人との豊かなつながりを大切にした「暮らし」と「なりわい」づくりに取り組む市民事業体です。「買い物」「住まい」「地域コミュニティ」の三つを主な事業領域として「生活者が主体的に」「多様な人々が手を携えて」「身近な自然、地域、人とのつながりを豊かに育む」ことに取り組んでいます。

さて先日、NPO と行政の関係について新たな可能性を感じた出来事がありました。滋賀県の協働推進部署からの依頼で講師を務めた、行政職員対象の協働推進セミナーでのことです。私たちの現場を見学された後での締めくくりのワークショップ。参加者が出しあった地域課題の中から一つを選び、各グループで考えるというものでした。私が同席したグループのテーマは「地域医療をどう整備するか」。最初は、既存の施策を地域に当てはめていく議論から始まりましたが、参加者の一人が、「もし故郷の自分の親が病気になったならと考えてみたのですが…」と発言したことをきっかけに、「ドクターヘリならぬドクター軽トラの整備を」「在宅医療の当事者の経験談を聞く機会を作ろう」などと、具体的で柔軟性のあるアイディアが次々と生まれました。

この出来事で感じたのは、一般に認識されている行政職員の「お堅さ」や「消極的な姿勢」は、職員の素養の問題ではない、ということでした。職員としての「職務意識」をいったん離れて、一住民、一市民としての「当事者意識」に立ち返れば、その人本来の創造性や自主性が引き出されることが確信できたのです。またそれは、NPO の文化に触れることによって可能になる、とも。

さらに、職員の方々が出される意見には、論理的な思考やリスク管理意識が色濃く反映されていました。これらは行政職員の方々だからこそ持ちうる能力であり、多くの NPO が抱えている弱みを補う力にもなると感じました。その日以来、行政職員の方々には、積極的に NPO や市民活動に参画したり、自ら興したりすることをおすすめしています。そのことが職員さんご本人にも、行政と NPO の双方にも、よい影響を与えると思うからです。

私にとって NPO とは、New Possibility Organization。NPO・地方行政研究コースに関わらせていただく中で、立場を超えた人と人との絆を育み、新たな公共を、共に創造させていただければと願っています。

修士論文執筆記

当コース修了生の論文執筆経験者２名に論文執筆の経験談をお伺いしました。現在奮闘中の院生の様子も掲載しているので、執筆中の皆さまはぜひ併せて参考にして下さい。

京都府地球温暖化防止活動推進センター
木原 浩貴さんの場合
（政策学研究科 2014 年度修了）

苦労やコツ

３歳と１歳の子がおり、仕事・育児・研究の鼎立に大変苦労して、ストレスを感じていました。「子どもと同じ時間に寝て、早朝に研究」というペースを確立してから、ようやく前に進み始めました。短くても構わないので、研究に集中する時間を毎日作ると良いと思います。

後輩へのアドバイス

いずれも、自身の反省からのアドバイスです。

①ぎりぎりまで書かない：ついつい本文を書きたくなりますが、執筆途中で現在地と目的地を見失うと、迷宮からの脱出に時間と労力がかかります。「目次作成→即本文」は非常に危険です。

②ツールで楽をする：「あの資料どこで見たっけ!?」に 108 回くらい直面します。私のようにずぼらな人は、性格矯正をあきらめて、パソコンのツールに頼るのが良いと思います。私は「Evernote」にずいぶん助けられました。

③事実と意見を区別する：調査結果や先行研究の内容などの「事実」の記述と、これらに対する「意見」の記述とを区別し、それが読み手にもわかるよう意識して執筆すると、論文がシャープになる・・・んだそうです。

④お尻を叩きあう：ネットを活用した同期院生との励ましあいが、私を孤独から救ってくれました。

執筆スケジュール

2014 年	６月	論文テーマが定まらずグダグダ苦悩
	７月	中間報告会に向けようやくテーマを決定
	８月	先行研究を読んで打ちひしがれる
	９～ 12 月	アンケート調査、５回のヒアリング調査
	年末年始	妻子を残して一人で帰省し論文執筆
2015 年	１月上	指導教官に初稿を提出
	１月下	修正を加えて締切前日に提出

特定非営利活動法人いちご
沢井 加織さんの場合
（政策学研究科 2014 年度修了）

苦労やコツ

研究内容が仕事と直結しているため、自分の中では絞っているつもりでも、論文としてみたときには、全く絞りきれていないことに気がつくのに非常に時間がかかってしまいました。そのため、研究したい内容を盛り込みすぎて、全く収集がつかないまま、夏を迎えてしまいました。私は、デイサービスを経営しているため、時間を自由に使えるようで使えない現状です。深夜に利用者に呼び出されることもありますし、仕事で問題が起きることもあります。そのような時には、体調の管理が非常に大変でした。

コツとして伝えられることは、「日々、コツコツと」です。「演習まで時間があるから」とか、「担当教官と会うまでに時間はあるから」と考えることなく、日々少しずつの積み重ねが非常に重要だと思います。私は、それが出来なかったので、年末年始に非常に慌ただしい時間を過ごさないといけなくなってしまいました。

後輩へのアドバイス

研究目的は単純明解がいいと思います。論文作成途中にも悩むことがたくさんあります。そんな時には、何故、なぜと細かくなるまで追求するようにしてください。

執筆スケジュール

2014 年	７月	中間発表　内容が絞りきれていないまま発表。
2014 年	７月末から８月初旬	研究対象地選定、視察 その後も常に連絡をとり、話を聞く
2014 年	９月	内容を絞りこむ意味をやっと理解し、内容を絞りこむ。 その後、これまで少しずつしか集めていなかった論文をやっと、本腰入れて集める。 この頃から時間があれば、国会図書館にこもっていました。
	年末年始	論文が 40,000 字を超える
2015 年	１月中旬	完成

執筆中の院生の感想

何とかなるではなく、「何とかしたい」の心意気で

二年制の過程に在学している私は昨年度一年間で諸先輩方の論文執筆の様子や教員の方々の指導を積極的に盗み見してきました。特別演習での発表を聞くことや中間発表に参加することで、なんとなく論文執筆の“いろは”がわかったつもりになっていましたが、実際に自分が執筆する時になると想像以上の難しさがありました。指導教官からの鋭い指摘に打ちのめされる時もあります。しかし、より良い論文を執筆するためには下を向いている暇など一秒も無いため、引き続き「何とかなるさ」ではなく「何とかしないと」という心構えで日々執筆を続けていきたいと思います。最後になりましたが、主査・副査の先生方には手のかかる学生を指導していただき心から感謝しています。また、色々と相談に乗っていただいた昨年度の修了生の先輩方にもこの場を借りてお礼を申し上げたいと思います。

木村 圭吾（政策学研究科 修士課程２年）

坂口安吾の言葉を胸に奮闘中

昨年度入学し、知的好奇心を刺激されながら、何とかこうとかして今日に至ります。入学時の予定では、２年目の夏あたりに修士論文が完成しているはずでした。しかし、おおかたの予想通り、現在においてその骨格がある程度姿を見せている程度が現状です。予定より予想が勝利しました。

論文を書いていくと次々と予定に反した興味や疑問点が出てきて、その度に立ち止まり検証作業が増えていきます。なので、もともと書こうと思っていた内容とはかなり変わってきました。

一応、現時点では混乱期を経て「骨格がある程度姿を見せている」つもりなので、ＰＣに向かう時間を確保すれば進むであろうことは自明の理であるのです。しかし、なかなかうまく行かないのも現実です。

なぜか？仕事が忙しいこと、それが理由です。その理由は社会人院生にとっての免罪符なのです。仕事が何事においても一番大事なのです。なので言い訳は完璧なのです。

解っているのです。自堕落な自分の本性を自覚する勇気に乏しいのです。

「人間は変りはしない。ただ人間へ戻ってきたのだ。人間は堕落する。義士も聖女も堕落する。それを防ぐことはできないし、防ぐことによって人を救うことはできない。人間は生き、人間は堕ちる。そのこと以外の中に人間を救う便利な近道はない。」

坂口安吾の言葉が胸に突き刺さります。

朝起きたら修士論文が出来上がっていることを何度夢に見たことか。小人と靴屋のように。

とにかく、明日から心を入れ替えて頑張る所存です。現実逃避と葛藤の日々をなんとか終結させるつもりでいます。

竹村 忠憲（政策学研究科 修士課程２年）

海外調査レポート

ホームレスＷ杯・オランダ大会を調査して

稗田 和博（政策学研究科 修士課程１年）

修士論文の研究調査のため、オランダで開催された「ホームレスＷ杯」を取材してきました。ホームレスＷ杯は、文字通りホームレス状態にある人だけが参加できるフットサルの世界大会。ホームレスの自立のきっかけづくりを目的に、2003 年から毎年、ホスト国を替えて開催されています。今年は、ゴッホ美術館などが建ち並ぶアムステルダムのミュージアム広場に、男子 48 ヶ国・女子 15 ヶ国の約 600 人のホームレス選手が集結。オランダ最大の観光スポットに設営された３面のフットサルコートは、道行く人の足を止めるなど社会的インパクトも大きく、この大会がホームレス問題への関心喚起をも意図した世界的イベントであることを再認識させられました。

アメリカチームの支援団体と

滞在期間は、９月 10 日～ 17 日の８日間。フットサル支援の有効性と課題を明らかにする参加各国へのインタビュー調査が主な目的で、限られた時間ではありましたが、五大陸 10 ヶ国（アメリカ、メキシコ、アルゼンチン、香港、韓国、カンボジア、オランダ、フランス、フィンランド、南アフリカ）の支援団体・選手に話を聞くことができました。

印象的だったのは、「サッカーでホームレス問題を解決する」というおとぎ話のような活動に真剣に取り組む人々が世界にはたくさんいると実感できたこと。この 10 年ほどの間に、世界ではホームレスのフットサルリーグが次々に立ち上がっており、調査結果ではＷ杯という頂点を目指すことで、選手の 70 ～ 90%に人生を変える大きな変化がある―との回答を得ました。

約 50 の国旗がはためく開会式

国土の 40%が埋立地のオランダでは、「世界は神がつくったが、オランダはオランダ人がつくった」という言葉が好んで使われる。その伝統や常識にとらわれない進取の気性に富んだ国民気質は、世界初の株式会社や国際法、ワークシェアリングから歩行者天国に至るまで、今では当たり前になった多くの制度や仕組みを生み出してきましたが、そのような国でホームレスＷ杯を調査できたことが何よりの喜びでした。

政策実践・探究演習ＩＡ（海外）で南京大学・金陵学院へ

澤田 猛虎（政策学研究科 修士課程 １年）

政策実践・探究演習ＩＡ（海外）として、９月５日から15日まで中国・南京を訪問してきました。現地では、南京大学・金陵学院の学生と一緒になって活動しました。

活動は主に、①生き物の生態系調査による環境考察、②地域の経済活動からみる循環型社会の考察、③それらを構成する『主体性』の形成原因考察、の３つのテーマから行いました。

プログラムが始まる前には、「コミュニケーションはとれるだろうか」「“反日感情”はないだろうか」といった不安がありましたが、現地の学生はとても暖かく出迎えてくださり、活動以外でも現地で有名な飲食店を紹介してくれて一緒に舌鼓をうつ、人気の観光スポットに案内してくださって観光するなどとした交流を通じて、そのような不安は解消されていきました。また活動面でも、議論などで一人ひとり様々な考え方、例えば中国側だからこそ見える視点の提起など、刺激を受ける場面が多々ありました。今後は、オープンキャンパスなどでこのプログラムでの学びを発信する機会があるので、振り返りなどをしっかりと行いたいと思います。最後になりますが、この場をお借りしてプログラムの実施に関わってくださった皆様に御礼申し上げます。

現地の食事を楽しむ

南京空港にて

TOPICS

合宿記

初秋の京都丹波で交流を深める政策学研究科合宿

岩松 義秀（政策学研究科 修士課程１年）

晴天に恵まれた初秋の京都丹波にて、美山の地域の方々との意見交換会や体験フィールド研究を、大学院生はもとより、白石研究科長、大矢野先生、矢作先生、イタリアからの研究員の方にもご参加いただき開催しました。

宿泊先である京北ゼミナールハウスでのバーベキュー意見交換会をはじめ、美山の女性グループである「つなガール美山」の皆さんとの朝食意見交換会や、神田美山観光協会会長さんと地元蕎麦打ちの団体「権兵衛の会」の前田会長さんの直々の御指導による蕎麦打ち体験やかやぶきの里の散策、京丹波町における丹波ワイン工場での５種類のワインテイスティングなどをおこないました。また、院生だけでしたが、亀岡市の真っ赤なヒガンバナの絨毯も見学しました。

そば打ちがんばってます

コスモスに囲まれたかやぶき屋根の集落

３台の自家用車で京都丹波を駆け巡る中、先生方の貴重なお話しをお聞かせいただいたことや、美山をはじめとした大自然、人とひととの交流により、深まる秋と深まる「きずな」が築けた２日のフィールドワークは、貴重な思い出の一つになったと皆さん、納得の表情でした。

修了生の今

三宅　遥（2012 年度修了）

新しい部署に異動となり心機一転

修了してから３年が経ち、社会人４年目となりました。

現在私は茨木市で勤務しており、今年は新しい部署へ異動となり心機一転しました。現在の仕事内容は、市のまちづくりの指針となる総合計画に沿った実施計画のローディングや産官学連携、まち・ひと・しごと関係の職務に携わっています。市全体を見ながら、市として進むべき方向性について触れることができる部署のため、毎日新鮮な気持ちで職務に励んでいます。

大学院での学び、同期の院生の皆さんとの出会いは私にとって宝物です。遠くに離れていても、いつもあの頃の同期は前を向き、様々な立場からチャレンジ精神を忘れないで前進しています。私も同期に置いていかれないように、行政の立場から、わがまち茨木の「まちづくり」に精一杯取り組んで行きたいと思います。

（茨木市役所勤務）

事務局インフォメーション

●地域リーダーシップ・先進的地域政策研究　講演会

○第4回
日時：2016年12月5日（土）13：30〜15：00
場所：深草学舎和顔館Ｂ106教室
講師：市川斉（公益社団法人シャンティ国際ボランティア会　常務理事）
テーマ：市民発・平和外交と安倍・安保法制――国際ＮＧＯ活動への影響を考える

●修士論文・課題研究及び要旨提出締切

2016年1月19日（火）

●修了証書授与式

日時：2016年3月19日（土）10：30〜
場所：龍谷大学深草学舎顕真館

NPO・地方行政研究コース　ニュースレター『グローカル通信』通巻 39 号　2015 年 12 月

発　行／龍谷大学大学院 NPO・地方行政研究コース
連絡先／政策学部教務課
TEL：075-645-2285 FAX：075-645-2101
H　P／http://www.ryukoku.ac.jp/gs_npo/
編　集／石川桃子、中原宏治
編集補助／斎藤雄二
監　修／大矢野修、的場信敬
印　刷／株式会社 田中プリント